宇宙生命哲学 ことはじめ

73

北里環境科学センター
名誉顧問／宇宙生命哲学者
伊藤　俊洋

自国第一主義の蔓延は、地球を破滅に導く

「喉元すぎれば熱さを忘れる」という諺がある。2020年の初頭、空前のコロナパンデミックが世界を襲った。「宇宙船地球号」は、「コロナ感染地球号」に様変わりし、一時、80億の人類の身近に死の恐怖が迫った。地下の駐車場が医療現場となり、遺体置き場にもなった。医療施設は壊滅状態になり、COVID-19以外の疾病に喘ぐ患者さんへの医療行為も困難になり、波及的に経済活動も低迷していった。

文明を継続するための最も重要な活動である教育の現場も、根底から崩壊の危機にあった。初等教育から高等教育までの全課程で、人と人が生身で接する機会を奪われて、多くの子どもたちが本来あるべき伸び伸び育つ環境を失ってしまった。その後遺症は、現在も子ども達を蝕んでいる。あのパンデミックが、さらに5年、10年と継続したら、この惨劇はどこまで進んだのだろうか。人類の叡智を結集して想像を超えるスピードでワクチンが開発され、世界中の科学者・医療従事者・行政者・一般市民のチームワークで史上最大の危機を克服することができた。細部では、様々な課題が残されたが、この一大事業は、国家・人種・民族・宗教・イデオロギーなどあらゆる壁を超えて集結した人類の叡智の勝利と言って良いだろう。しかし、一方では、国と国が国境を挟んでミサイルを撃ち合い、血で血を洗う凄惨な戦争を続けている。なぜ、こうなるのだろうか？

宇宙から地球を眺め、地球上で起こっている問題の核心を見極めて、的確に、スピーディーに、スマートに解決しようとするのが、「宇宙生命哲学」の真髄である。地球上の生命現象は、人類だけの幸福を目指して成立するものではない。自国第一主義から人類第一主義へ、そして生命第一主義へと意識を高め、さらに環境第一主義へと意識を変革しなければ、地球上に究極の平和な時空間を創ることはできない。人類は、うすうすそのことに気がついて、パリ協定を結び、WHO（世界保健機関）を機能させ、草の根運動としてSDGsを推進してきた。

署名した大統領令を掲げるトランプ大統領＝ロイター

第47代米国大統領に就任したドナルド・トランプ氏は、自国第一主義を唱え、これらの人類の良心的な活動を叩き壊そうとしている。このトランプ劇場2・0に対して、知識人が高みの見物をしていて良いのだろうか。我々は、文明を救うための千載一遇のチャンスの中にいると考えよう。宇宙生命哲学に支えられた環境が整えば、ウクライナ戦争やパレスチナ問題も容易に解決できる筈である。